

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04628

研究課題名(和文)日本の大学におけるカリキュラムマネジメントに関する実践的研究

研究課題名(英文)A Practical Study of Curriculum Management in Japanese Universities

研究代表者

林 透(Hayashi, Toru)

山口大学・大学教育機構・准教授

研究者番号：20582951

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文): 今日<sup>1</sup>の大学教育では、多様な場面に対応できる対人基礎力や専門知識を活用しながら課題に対処できる対課題基礎力の育成が重要である。これらの汎用的能力の育成にはカリキュラムベースでの対応が必要であり、3つのポリシーの公表義務化を通して、学修評価方法を盛り込むカリキュラム・ポリシーのあり方が大きく問われている。そこで、3つのポリシー策定状況調査を端緒に、カリキュラムベースでの学修成果アセスメントの実態調査、米国・英国との比較研究、カリキュラムマネジメントの実態に関するアンケート調査実施などを通して、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの現状と課題を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、「日本の高等教育政策としての3つのポリシーに基づく質保証に着目した点」「学修評価の方法を含めたカリキュラム・ポリシーの重要性に着目した点」「大学におけるカリキュラムマネジメントの事例研究の蓄積と新たなモデルの提言を目指した点」を挙げることができる。当該研究を通して、「事例研究及び比較研究によるカリキュラムマネジメントに関する実践的研究の深化」「大学教職員、ステークホルダーの参画によるカリキュラムマネジメントの方向性を示唆」「大学教育の質保証にインパクトを与えるカリキュラムマネジメントの重要性の提示」といった社会的に意義のある成果を挙げることができた。

研究成果の概要(英文): It is very important for the current University Education to foster the basic skills communicating with people at diverse situations and solving problems with specific knowledge. As the learning outcomes of such generic skills is necessary to think about on curriculum level, Curriculum Policy covering the way of learning assessment has become more and more important since compulsory release of three policies. Therefore, we conducted the investigation of three policies description, practical study of learning assessment on curriculum level, comparative study with cases on U.S. and U.K., and questionnaire survey of curriculum management. Finally, we could clarify the current condition and some problems around the curriculum management in Japanese Universities.

研究分野：教育学

キーワード：カリキュラムマネジメント 3つのポリシー アセスメント 質保証 ステークホルダー COC+ 比較研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 大学教育の質保証：日本の高等教育政策では、2005年1月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』を契機に、3つのポリシー（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）に基づく大学教育の質保証を進めてきた。2012年8月の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』において、学位プログラムという概念が表れ、学生が「何を学んだか」ではなく「何ができるようになったか」を問う、教育の結果とその証である質の高い学位授与であるアウトカムベースの大学教育改革の方向性が示された。研究者の立場からは、天野郁夫(2013)が、戦後日本の高等教育の質保証の装置を四つに整理し、「大学設置基準」「入学者選抜」「第三者評価制度」を挙げ、今後は、「教育過程(プロセス)」が重要となると指摘している。

(2) カリキュラム研究：一方、カリキュラム研究については、従来から初等中等教育を中心とした研究に偏る傾向が見られ、大学におけるカリキュラム研究については、関正夫(2001)や本章編(2003)による総論が中心であった。近年に至り、大学教育の組織的取組が求められる中で、日本高等教育開発協会・ベネッセ教育総合研究所編(2016)によるカリキュラム改革に着目したアンケート調査・事例調査が注目される。しかし、中留武昭(2012)が指摘するように、大学教育におけるカリキュラム研究は初等中等教育に比べ遅れ、大学のカリキュラムマネジメントを進めるには、「事例研究の累積による基軸と構成要素の緻密な検証」「数量調査によるモデルの一般化を図り、作成したモデルにおける開発的研究(ガイドライン作成等)」の必要性を示唆している。

(3) カリキュラムマネジメント：このような経緯の中で、2016年3月には、3つのポリシー公表が法令義務化され、ディプロマ・ポリシーに基づくカリキュラム編成やカリキュラム・ポリシーに基づく学習成果アセスメントといった、3つのポリシーに基づく質保証が一層強化されることとなった。特に、カリキュラム・ポリシーを「ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するかを定める基本方針」と定義付け、カリキュラム・ポリシーに基づくカリキュラムマネジメントが、大学教育の質保証にとって、今後益々重要になると考えられている。

今日の大学運営は、ステークホルダーの存在を無視できない。教育に関しても大学教職員だけでなく、ステークホルダーとの協働によるカリキュラムマネジメントの対応を迫られている。また、アクティブ・ラーニングの導入や、汎用的能力育成を目的とした体験型学習などの導入、正課外教育による学修成果の可視化など、学生の学びや教育手法は多様化し、カリキュラムマネジメントの手法もまた多様化している。

研究代表者は、ここ6年間にわたり、「日本の大学における組織開発(OD)に関する実証的研究」及び「日本の大学における組織開発(OD)の担い手に関する実践的研究」(基盤研究C(一般))により、大学の組織変容にインパクトを与えるアクター(大学管理職、大学教員、大学職員、学生)の関係性に着目して多くの研究成果を挙げてきた。しかし、大学教育のアカウントビリティが求められる中で、大学組織内のアクターの関係性に着目するだけでは不十分であり、大学教育のコンテンツであるカリキュラムという動態システムに着目する必要性を感じていた。以上のように、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントに関する実践的研究は黎明期にある。日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの事例研究及び課題抽出、さらには、英米の大学との比較研究に取り組むことで、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントのモデルの提示を目指す。さらに、これまでの研究代表者の研究成果を基礎に、大学教職員とステークホルダーが参画し、運営されるカリキュラムマネジメントのあり方を探求する研究を着想するに至った。

### 2. 研究の目的

近年の日本の高等教育政策では、3つのポリシー(アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー)に基づく大学教育の質保証を進めてきた。特に、大学教育の質保証にとっては、教育過程(プロセス)が重要と考えられ、学生の学修成果の評価を含んだカリキュラム・ポリシーに基づくカリキュラムマネジメントが今後益々重要になると考えられている。日本の大学教育におけるカリキュラム研究は未だ不十分であり、新たな視点として、近年、多様化する大学の教育や運営への各アクターの役割にも注目しながら、カリキュラムマネジメントに関する国内外の事例研究及び比較研究を行うことで、実践的研究として深化させ、大学教育の質保証にインパクトを与えるカリキュラムマネジメントの新たなモデルの提言を目指す。

### 3. 研究の方法

今日の大学教育は、アクティブ・ラーニングの導入に伴い、多様な人々や場面に対応できる対人基礎力や専門知識を活用・工夫しながら課題に対処できる対課題基礎力などの育成が重要となっている。汎用的能力の育成にはカリキュラムベースでの対応が必要であり、平成29年度からの3つのポリシーの公表義務化を通して、学修評価方法を盛り込んだカリキュラム・ポリシーのあり方が大きく問われている。そこで、3つのポリシー策定状況調査を端緒に、文科省COC

+事業でのカリキュラム設計、米国・英国との比較研究などを交えながら、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの現状と課題を明らかにする。

3年間の本研究において、下記の3つのテーマについて段階的に取り組む。

- (1) 日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの事例研究及び課題抽出
- (2) 米国・英国の大学におけるカリキュラムマネジメントの比較研究
- (3) 日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの新たなモデルの提言

(1)では、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの事例研究を通して課題抽出を行い、(2)では、米国・英国の大学を比較対象とし、両国のカリキュラムマネジメントの現状と課題について文献および現地調査を行う。(3)では、(1)及び(2)の成果を踏まえ、大学におけるカリキュラムマネジメントについて理論整理を行い、新たなモデルを提言する。

#### 4. 研究成果

本研究の学術的意義として、「日本の高等教育政策としての3つのポリシーに基づく質保証に着目した点」「学修評価の方法を含めたカリキュラム・ポリシーの重要性に着目した点」「大学におけるカリキュラムマネジメントの事例研究の蓄積と新たなモデルの提言を目指した点」を挙げることができる。当該研究を通して、「事例研究及び比較研究によるカリキュラムマネジメントに関する実践的研究の深化」「大学教職員、ステークホルダーの参画によるカリキュラムマネジメントの方向性を示唆」「大学教育の質保証にインパクトを与えるカリキュラムマネジメントの重要性の提示」といった社会的に意義のある成果を挙げることができた。

各年度の研究成果及び今後の課題を列挙する。

平成29年度では、3つのポリシー策定状況調査を端緒に、文科省COC+事業でのカリキュラム設計、米国・英国との比較研究などを交えながら、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの現状と課題を明らかにすることに取り組んだ。

(1)3つのポリシー策定及び学修評価方法の状況調査について、平成28年3月に公表された3つのポリシー策定のガイドラインに基づき、各大学ではポリシーの新規策定または見直しの作業を進め、2017年度には公表義務化された。カリキュラム・ポリシーにおいては学修評価方法の記載が求められており、全体的な状況調査のほか、山口大学、新潟大学などの事例調査を行い、カリキュラムマネジメントのあり方について情報収集した。

(2)文部科学省COC+事業における地域人材育成カリキュラム設計及び運営に関する分析について、大学と地域が協働したカリキュラム設計に着目し、授業運営及び成績評価などのあり方を通して、当該カリキュラムマネジメントの実情に関し、高知大学、北九州市立大学などの事例調査を行うとともに、現状と課題の抽出を行った。

(3)日米共同研究を通じたカリキュラムマネジメントに関する比較研究について、自身が研究代表者を務めた「日本の大学における組織開発(OD)の担い手に関する実践的研究」(基盤研究C(一般)2014~2016年度)で実施した日米FD比較共同研究の結果を参照しながら、米国におけるカリキュラム研究に関する情報収集を行った。

これらの研究を通して、平成29年度には、雑誌論文5件、学会発表13件(うち国際学会1件、招待講演3件)、図書刊行2件の成果を挙げることができ、特に、『IDE:現代の高等教育』第598号に、山口大学における教育改革に関する招待論文を掲載することができた。

平成30年度では、前年度の研究実績を基礎にして、カリキュラムベースでの学修成果アセスメントの実態調査、米国・英国との比較研究などを交えながら、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの現状と課題を明らかにすることに引き続き取り組んだ。

(1)2017年度の3つのポリシーの公表義務化を契機に、ディプロマ・ポリシーに基づくカリキュラムマネジメント、さらには、ディプロマ・ポリシー達成度の可視化の取組が重要視されるようになった。このため、カリキュラムベースでの学修成果アセスメントの観点から、山口大学、宮崎国際大学、日本福祉大学などの事例調査を行い、カリキュラムマネジメントのあり方について情報収集した。

(2)文部科学省COC+事業における地域人材育成カリキュラム設計及び運営に関する分析について、大学と地域が協働したカリキュラム設計に着目し、授業運営及び成績評価などのあり方を通して、当該カリキュラムマネジメントの実情に関し、現状と課題の抽出を進めた。

(3)日米共同研究を通じたカリキュラムマネジメントに関する比較研究について、自身が研究代表者を務めた「日本の大学における組織開発(OD)の担い手に関する実践的研究」(基盤研究C(一般)2014~2016年度)で実施した日米FD比較共同研究の結果を参照しながら、米国学会における成果発表を行うとともに、英国におけるカリキュラム研究に関する情報収集を行った。

これらの研究を通して、平成30年度には、雑誌論文3件、学会発表15件(うち国際学会2件、招待講演5件)、図書刊行1件の成果を挙げることができ、特に、ICED2018(国際学会)において、海外共同研究者とともに、日米FD比較共同研究の成果発表を行うことができた。

最終年度である令和元年度では、過去2年間の研究実績を基礎にして、カリキュラムベースでの学修成果アセスメントの実態調査、米国・英国との比較研究、さらには、カリキュラムマ

ジメントの実態に関するアンケート調査実施などを通して、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの現状と課題を明らかにすることができた。

(1) カリキュラムベースでの学修成果アセスメントの観点から、山口大学、琉球大学などの事例調査を行い、カリキュラムマネジメントのあり方について情報収集した。

(2) 文部科学省 COC+事業における地域人材育成カリキュラム設計及び運営に関する分析について、大学と地域が協働したカリキュラム設計に着目し、授業運営及び成績評価などのあり方を通して、当該カリキュラムマネジメントに関する成果発表を行った。

(3) これまでの研究成果を踏まえながら、日本の大学におけるカリキュラムマネジメントの実態に関するアンケート調査を行い、分析を進めた。

(4) カリキュラムマネジメントに関する比較研究について、自身が研究代表者を務めた「日本の大学における組織開発(OD)の担い手に関する実践的研究」(基盤研究C(一般)2014~2016年度)で実施した日米FD比較共同研究の結果を参照しながら、米国ウェスタン・ミシガン大学での成果発表及び調査研究を行うとともに、英国におけるカリキュラムマネジメントに関する調査研究を行った。

これらの研究を通して、令和元年度には、雑誌論文3件、学会発表26件(うち国際学会2件、招待講演9件)、図書刊行4件の成果を挙げることができ、特に、『エビデンスの時代のFD:現在から未来への架橋』の翻訳刊行とともに、数多くの招待講演を受けることができた。

本研究では当初の計画どおり成果を挙げることができたと考えている。なお、今後の課題としては、カリキュラムマネジメントを通じた教育成果や学習成果の効果の把握や分析、ステークホルダーの参画によるカリキュラムマネジメントの好事例の収集と分析を更に深めていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林透	4. 巻 17
2. 論文標題 大学間連携を通じたFD・SD活動に関する成果と課題 - 山口県の取組を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学大学教育機構・大学教育	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎慎一、林透、深野政之	4. 巻 10
2. 論文標題 日米比較研究から見る総合的な学術能力の開発に資するFDの構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山崎慎一、林透、深野政之	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤木清、濱名篤、林透、望月雅光、大関智史	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 学修成果可視化の先にあるものとは - アセスメント文化の醸成 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 71-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤木清、濱名篤、林透、安達哲夫、福島真司、富岡和久	4. 巻 40(2)
2. 論文標題 アセスメントポリシーの構築とIRの活用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 112-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林透	4. 巻 16
2. 論文標題 教員・職員・研究者協働によるAL型授業改善に関する実践的研究 - 「山口と世界」での実践事例を通して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学大学教育機構・大学教育	6. 最初と最後の頁 37-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林透	4. 巻 16
2. 論文標題 大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の取組と特徴 - YU-AP推進室の活動報告を兼ねて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学大学教育機構・大学教育	6. 最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林透	4. 巻 15
2. 論文標題 ALベストティーチャー表彰制度の設計と効果に関する実践的研究 - 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の取組を中心に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学大学教育機構・大学教育	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林透	4. 巻 598
2. 論文標題 「学びの好循環」を目指す山口大学の教育改革	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 IDE:現代の高等教育	6. 最初と最後の頁 56-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toru Hayashi	4. 巻 31
2. 論文標題 A new approach to the assessment of learning outcomes in Japanese Universities	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SRHE(Society for Research into Higher Education) News	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林透	4. 巻 14
2. 論文標題 大学教育におけるカリキュラムマネジメントに関する実践的研究 - やまぐち未来創生人材育成プログラムを事例にして -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山口大学大学教育機構・大学教育	6. 最初と最後の頁 10～23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林透、眞鍋和博、猪股歳之、岩瀬峰代、西村君平、山下貴弘	4. 巻 39(2)
2. 論文標題 地域連携学習(コミュニティー・ベースト・ラーニング)の設計・運営・評価とその担い手のあり方について考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 110～114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計54件(うち招待講演 17件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 山口大学における現状と課題(教学マネジメントとIRをつなぐ組織体制づくりを考える)
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 地域人材育成プログラムの開発・運営・成果に関する総括的考察～やまぐち未来創生人材育成プログラムの実践を通して～
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大関智史、林透、深野政之、山崎慎一、斎藤有吾
2. 発表標題 DP達成のためのカリキュラム・マネジメント及び学修成果アセスメントの実態に関する考察
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林透、大関智史
2. 発表標題 英国の大学における教育プログラム評価に関する考察と日本への示唆
3. 学会等名 日本高等教育学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 大学教育再生加速プログラム（YU-AP）における学修成果可視化～山口大学生コンピテンシー、YU CoB CuSを通して～
3. 学会等名 山口大学・共育ワークショップ2020（第16回アドバイス会議）
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 林透
2. 発表標題 高校生×大学生による対話型授業実践考ー山口県内における取組から -
3. 学会等名 第26回京都大学・大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 アクティブ・ラーニング型授業の設計と学習評価
3. 学会等名 2019年度至誠館大学FD・SD研修会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 山口大学YFL育成プログラムの学習成果
3. 学会等名 2019年度COC+事業FD・SDワークショップ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 大学における教学マネジメントの過去・現在・未来
3. 学会等名 全国専門学校教育研究会・教学マネジメント研修（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toru Hayashi
2. 発表標題 Curriculum-Based Assessment in Japanese Universities: focusing on Learning Outcomes of Individual Student
3. 学会等名 SRHE Newer and Early Career Researchers Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透、石井和也
2. 発表標題 学修成果可視化の対象単位に関する一考察～全学的教育目標とDP(ディプロマ・ポリシー)に着目して～
3. 学会等名 2019年度大学教育学会課題研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 「学びの好循環」を支える学習支援とその担い手の充実
3. 学会等名 令和元年度 高知大学・大阪工業大学AP事業シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 ルーブリックによる学習評価の価値と可能性について
3. 学会等名 同志社大学社会学部FD研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 山口大学における学位プログラム単位の質保証～YU CoB CuSによる学修成果可視化の可能性～
3. 学会等名 AP事業北九州合同セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 アクティブ・ラーニング型授業の設計と学習評価
3. 学会等名 2019年度山口東京理科大学FD講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 学修成果の可視化～教学IR、学修成果可視化を通じた教学マネジメント改革～
3. 学会等名 旭川医科大学IR室セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 山口大学・学士課程教育における学修成果の可視化と活用：マクロ・ミドル・マイクロレベルのアセスメントに着目して
3. 学会等名 大学教育再生加速プログラム（AP）テーマ ・ 複合型採択校合同シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 自律的学習者育成のための学習支援の取組と課題
3. 学会等名 令和元年度全国大学教育研究センター等協議会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 山口大学における学生協働～発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場～
3. 学会等名 大学行政管理学会第23回研究集会（ワークショップ）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高林友美、林透
2. 発表標題 共通教育科目のアクティブラーニングーベストティーチャーインタビューの質的分析ー
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高林友美、林透
2. 発表標題 eポートフォリオを活用した初年次アセスメント科目における振り返りの実践
3. 学会等名 第10回Maharaオープンフォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toru Hayashi, Masayuki Fukano, Satoshi Ozeki
2. 発表標題 Measurement and Disclosure of Learning Outcomes in Japanese University Education
3. 学会等名 Evaluation Cafe, Western Michigan University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高林友美、林透
2. 発表標題 教授方法の可視化による授業改善についての考察－アクティブ・ラーニングポイントの妥当性検証－
3. 学会等名 日本教育工学会研究会 (高等教育におけるFD・SD・IR・学修支援)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 文庫本を教材にした人文・社会科学系教養教育科目の実践と展望～山口大学における各種教育改革を踏まえて～
3. 学会等名 第67回中国・四国地区大学教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 地域人材育成プログラム開発を通じたアセスメントや学修成果
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透、堀井祐介
2. 発表標題 ベトナム高等教育に関する内部質保証と外部質保証に関する一考察～ASEAN地域における高等教育質保証システムから得られる示唆～
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透、山浦晴男、鈴木春菜
2. 発表標題 住民による内発的地域生成につなぐ授業設計考～サーピスラーニング基礎（ミニ移動大学in仙崎）の実践を通して～
3. 学会等名 京都大学・第25回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）からのメッセージ
3. 学会等名 山口大学・共育ワークショップ2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toru Hayashi
2. 発表標題 Student Learning Assessment based on three Educational Policies in Japanese Universities: focusing on Assessment Model connected with Curriculum Mapping
3. 学会等名 SRHE Newer and Early Career Researchers Conference 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透、大関智史
2. 発表標題 ディプロマ・ポリシー（DP）達成度の可視化と自立的学修に関する一考察～山口大学と宮崎国際大学の事例を中心に～
3. 学会等名 大学教育学会2018年度課題研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 探究活動の意義や効果、学習評価を知る、活かす
3. 学会等名 平成30年度山口県立萩高等学校 校内教員研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 総合的な大学教育改革のためのエンジン～山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の使命～
3. 学会等名 平成30年度 大学教育再生加速プログラム テーマ 及びテーマ ・ 複合型共同開催シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 「アクティブ・ラーニング型授業」と「学生の学び」の好循環を目指して～山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の軌跡～
3. 学会等名 福岡医療短期大学 平成30年度APシンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 学修成果可視化の意義と学生の「学び」～YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) を中心に～
3. 学会等名 山口東京理科大学FD・SD研修会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長澤多代、林透、日高友江
2. 発表標題 授業外学修を促進するアクティブラーニング型授業のデザイン：山口大学におけるアクション・リサーチをもとに
3. 学会等名 大学教育学会第40回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 地域人材育成カリキュラムと学修成果に関する一考察～やまぐち未来創生人材 (YFL) 育成プログラムの実践を通して～
3. 学会等名 大学教育学会第40回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 濱名篤、林透、安達哲夫、福島真司、藤木清
2. 発表標題 アセスメントポリシーの構築とIRの活用
3. 学会等名 大学教育学会第40回大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 Toru Hayashi, Shinichi Yamazaki, Masayuki Fukano, Andrea Beach, Mary Deane Sorcinelli
2. 発表標題 A Comparison of Priorities, Services, and Approaches to Educational Development in Japan and the U.S.
3. 学会等名 The International Consortium for Educational Development (ICED) Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 共通教育（教養教育）におけるフィールド学習を取り入れた人文・社会科学の新展開
3. 学会等名 第66回中国・四国地区大学教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透、山崎慎一、深野政之、斎藤有吾
2. 発表標題 大学教育におけるカリキュラムマネジメントに関する基礎的研究～国立大学におけるディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを中心に～
3. 学会等名 日本高等教育学会第21回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 学修成果可視化とポートフォリオを考える ～YU CoB CuS(Yamaguchi University Competency-Based Curricular System)を中心に～
3. 学会等名 熊本保健科学大学eポートフォリオ検討WG勉強会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透、長澤多代、日高友江
2. 発表標題 教員・職員・研究者協働によるAL型授業改善に関する一考察 - 「山口と世界」での実践事例を通して -
3. 学会等名 京都大学・第24回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 「多様化する教室内外の学び」と「教育の質保証」
3. 学会等名 宇部工業高等専門学校・徳山工業高等専門学校AP事業合同シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透、森本和宏、天本真美
2. 発表標題 山口県内の大学間連携によるFD・SD活動の展開
3. 学会等名 大学マネジメントセミナー2017inやまぐち
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 教職学協働を通じたラーニング・コミュニティの形成と成果
3. 学会等名 宇都宮大学・AP事業中間シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toru Hayashi
2. 発表標題 New direction for the assessment of learning outcomes in Japanese Universities: focusing on the combination of the direct and indirect measures
3. 学会等名 SRHE Newer & Early Career Researchers' Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透、篠田雅人、斎藤有吾
2. 発表標題 アクティブ・ラーニングの推進を通じた組織変容に関する考察～ALベストティーチャー表彰制度と『Teaching&Learning Catalog』を中心に～
3. 学会等名 大学教育学会2017年度課題研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透、篠田雅人
2. 発表標題 「学びの好循環」を目指す山口大学AP事業の軌跡
3. 学会等名 高知大学主催・平成29年度大学教育再生加速プログラム（AP）事業シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 山口大学における教育の質保証の変遷～Paradigm Shift from Teaching to Learning～
3. 学会等名 平成29年度全国大学教育研究センター等協議会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 IR初期活動におけるファクトブック作成過程とその意義～SDの観点からの省察～
3. 学会等名 大学行政管理学会第21回研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 共通教育（教養教育）の枠組を活かした地域連携学習の現状と課題
3. 学会等名 第65回中国・四国地区大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透、山下貴弘
2. 発表標題 地域志向型教育プログラムにおけるカリキュラムマネジメントの実際 - COC + コーディネーターの役割を交えて -
3. 学会等名 大学教育学会第39回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山崎慎一、林透、深野政之
2. 発表標題 日米比較調査アンケートから見たFD活動の実態とその相違
3. 学会等名 日本高等教育学会第20回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林透
2. 発表標題 IR活動を通じたスタッフ・ディベロップメント考～地方国立大学での取組実践を通して～
3. 学会等名 日本高等教育学会第20回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 林透、深野政之、山崎慎一、大関智史（共訳）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 226
3. 書名 エビデンスの時代のFD:現在から未来への架橋	

1. 著者名 林透	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山口大学	5. 総ページ数 104
3. 書名 日本の大学におけるカリキュラムマネジメントに関する実践的研究（科研費研究成果報告書）	

1. 著者名 林透	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山口大学YU-AP推進室	5. 総ページ数 52
3. 書名 山口大学共育ワークショップの軌跡2013～2020	

1. 著者名 林透、伊藤千恵美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山口大学YU-AP推進室	5. 総ページ数 107
3. 書名 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）アニュアルレポート2019	

1. 著者名 林透、高林友美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山口大学YU-AP推進室	5. 総ページ数 125
3. 書名 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）アニュアルレポート2018	

1. 著者名 林透、篠田雅人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山口大学YU-AP推進室	5. 総ページ数 137
3. 書名 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）アニュアルレポート2017	

1. 著者名 橋本勝、林透、金西計英、戸田由美子、倉部史記、河原和之、小林祐也、久保卓也	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 120
3. 書名 ライト・アクティブラーニングのすすめ	

〔産業財産権〕

[ その他 ]

researchmap of Toru Hayashi  
<https://researchmap.jp/hayatoru>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 慎一  (Yamazaki Shinichi)  (10636674)	桜美林大学・心理・教育学系・助教   (32605)	
研究分担者	深野 政之  (Fukano Masayuki)  (40552758)	大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授   (24403)	
研究分担者	斎藤 有吾  (Saito Yugo)  (50781423)	新潟大学・経営戦略本部・准教授   (13101)	
研究分担者	大関 智史  (Ozeki Satoshi)  (40831582)	旭川医科大学・医学部・講師   (10107)	